

島の暮らし：島唄と三味線

島唄は奄美大島の伝統的な民謡です。島（island）と唄（song）と書かれますが、奄美の方言ではシマは集落という意味でもあるので、多くの人が自分の集落の音楽のことを島唄と呼んでいます。島唄は、男女ともに裏声で奄美の方言で歌われ、歌い手の歌はしばしば合いの手役によって応えられます。唄は、奄美三線という三弦の楽器によって伴奏され、日本音階に基づいています。奄美の三線は沖縄の三線と同じ本体を使います。しかし、奄美三線では、歌い手の声域に合わせてより高い音に調律されるより細い弦が用いられ、また、水牛の角ではなく竹のバチで演奏されます。曲によっては、チジンと呼ばれる小太鼓や指笛と呼ばれる高音の口笛が拍子の伴奏に加わります。

島唄の起源と発展

島唄の起源は不明ですが、島唄には歌の構造や三線の使用など沖縄の音楽との共通点が存在します。音楽史研究者の中には、奄美特有のスタイルは、奄美大島の人々がサトウキビ畑で働くことを強いられていた薩摩藩による植民地支配時代に生まれたと考える人もいます。島唄は彼らの苦しみや夢を表現するため使われていました。島の集落は内陸の山地によって隔てられていたため、それぞれの集落で異なるスタイルや唄が発展しました。今日でも、人々は例えばその唄が北部の唄（緩やかなテンポ）なのか、それとも南部の唄（よりリズムカル）なのか判別することができます。

島の物語

島唄のテーマは様々です。宗教的な性質を持つものもあれば、子どもたちに道徳的な教えを伝えるものもあります。また、肉体労働の辛さ、別れ、憧れをテーマにした唄や、滑稽な歌もあります。これらの歌は伝統的にテーブルを囲んだ家族や友人同士によって歌われました。この慣習は「唄あしび」と呼ばれます。人々は交代で様々な節を歌い、即興も歓迎されました。唄あしびはあまり行われなくなりましたが、奄美大島の人々にとって、島唄は現在でも対話のような形で楽しめる音楽です。

唄の島

近年、奄美大島の方言や音楽への関心が高まり、数多くの地元ラジオ局が地元のミュージシャンと島唄を中心としたラインナップを放送しています。島の音楽に興味のある人は、地元のレストランやバー、ライブイベントなどで演奏を聞くことができます。